ディランの如く

みうらじゅん「アイデン&ティティ」連載特別企画

構成／久住昌之

CLUB QUATTRO 1991

中島、激しく憧れよ！

久住昌之

JUN・MIURA

1979

テレビに出て、少し有名になった中島は、居酒屋でファンの女のコを口説きながら心の中で、
「こんなの、ロックじゃない」
とつぶやく。その時ディランが隣にいる。
何がロックか。それは彼もわからない。しかし、少なくともボブ・ディランは彼にとってまぎれもなくロックだ。ディランは、金や数字で計れない、世の中のカッコイイものを計る定規なのだ。
ディランには、言い訳や冗談や時間かせぎは通じない。転がり続けるロックン・ローラーに、そんなものに付き合ってる時間は無いのだ。ディランはいつも裸で、ギター一本と自分の喉だけで、まっすぐ世界に向かって歌っているのだ。ギリギリの崖っぷちで。
ディランのようにカッコヨクありたいと、本気で思う時、彼は純粋だ。そしてきっと美しい。それゆえ現実とのギャップに苦悩するのだ。
人をウラヤマシがる事は醜い。しかし人に憧れるというのは、美しい行為だと思う。
（次の頁へ）

『大脱走』っていう映画、久しぶりにLDで観てさ。あれ、一人も女出てきィへんでしょ。だけどムチャクチャかっこいいんだ」

みうらじゅんは言った。ボクも日比谷で『七人の侍』を初めて劇場で観て、まだ興奮が冷めていなかったから、彼の気持ちがわかるようだった。

「でも観終ってさ、さて仕事するか、って机に行ってさ、天地45ミリ×左右63ミリのカエルのイラスト描くのってさ（笑）違うぜ！オレはこんな事してる場合じゃない!!って」

わかる。だけど、こんな事してる場合じゃなくて、どんな事する場合なのか？

そのイラダチが彼に『アイデン&ティティ』という長編マンガを描かせているのだ。ボクはこれほどリアルなロックマンガ（日本の）を、他に読んだ事が無い。ロックを描きながら、描いている行為そのものがロック（日本の）になっているのは彼だけだ。

それはみうらじゅんが実際ロックバンドをやり、TVに出て、キャーキャー言われ、ツアーをやって、CDを出して、仲間割れしたり、新しい仲間と知り合ったりして、ロックンローラー（日本の）の歓びと苦悩をステージで正面から受けてきたからだろう。

「だけど『大脱走』に対して、オレに何ができるか、考えて考えて、思い浮かんだのが、『大脱腸』なんだよね。ダメだ」

ニール・ヤング「WELD」より
(REPRISE)

みうらじゅんはいい奴だ。

ボクらが憧れる「ロックな奴」というのは、自転車で言うと、変速ギアが最初っから付いてない自転車に乗って、どこでもガンガン突っ走る奴の事だ。

ボクらの乗ってる自転車には、もともと何段かのギアが付いている。会う人や、出る場所、来た仕事やする遊びによって、ボク達はギアチェンジをするわけだ。

これを社会人は「気を使う」なんていったりする。気を配るとか。トレンドを見るとか。

だけど本物のロックンローラーには、そういうギアは無い。いつ、どこでも、何をしてもディランはいつものディランのままだ。

こないだ死んだマイルス・デイビスもそうだった。昔の黒澤映画の三船敏郎なんかもそうだ。横尾忠則もそうだな。寅さんも入れよう。

彼らには変速ギアが付いてない。

だからいきなり止まったり、スピードが落とせなかったり、人や物とぶつかりもする。露骨におびえたり、露骨に興奮したり、露骨に怒ったりする。気の使い方を知らないから、周囲の人間には嫌われたりもする。

ところが最終的に、彼らの表現は、周囲の人の頭の上を飛び越えて、国も言葉も時代も違う人々の心を感動で震わせてしまう。

でもボク達は、不幸にも生まれた時からギアが5段ぐらい付いちゃっている。周囲の眼ばかり気にして、しょっ中ギアチェンジばかりしている。だから逆に周囲をなかなか越えられない。

そのうちに、その自転車をこいでいる自分の足の力というのが、どれだけあるのか、わからなくなってくる。自分の足こそが自分であり、アイデンティティなんだろうに。

ボクが一番イヤなのは、ギアチェンジのしすぎで、ギアが「バカになっちゃう」状態だ。これぞ一番かっこ悪～いオトッツァンの姿であろう。

みうらじゅんはボブ・ディランに魂を捧げた、と言っているけど、ボクはディランよりニール・ヤングだった。

中学・高校とニール・ヤングに憧れニール・ヤングに没頭していた。だけど'80年代は全然聴かなかった。アルバムも買わなかった。

ところが今年、いきなりニールが湾岸戦争の真っ只中にやったライヴのCDが発表された。「ジジイがドパンクやってる」と評判になった。さっそく買ってきて聴いて、ブッ飛びましたね。久々に「感動」しました。ちょっと笑っちゃったけど。うれしかった。太い。ガーンと来た。

そして、そのニールがなんとディランの『風に吹かれて』を演奏したのには驚いた。なんだコレは。と思いつつ胸が熱くなった。こういう子供っぽい感激を自宅の部屋で一人でしたのは本当に久しぶりだ。

まだボクの中にも「憧れ力」の残量がだいぶある気がして少し喜ばしくなっちったぜ。

日本という国に、深く憂いているロックンローラー、みうらじゅんの長い長い弾き語りロック『アイデン&ティティ』の結末はどこへ向かうのか。

このバンドブームが終った東京で、中島は、中島達はどこへ行くのか。

♬おれたちはバカだ、
　息のしかたを知ってるだけでも
　奇跡だぜ――Bob Dylan「愚かな風」より

本当にカッコイイものを知ってしまった奴は、それから逃れる事ができない。それは幸福な悲劇だ。がんばれ中島！

岩本
いち早くプロになり、生き残るためには手段を選ばない。

グルーピー
芸能人とならすぐに寝る。

中島の彼女
甘やかさず、しかしいつも中島を優しく見守っている。同棲している。

事務所の社長
売るためならサイン会でも何でもさせる。昔はGSで活躍していた。

中島
バンドブームでデビューはしたが、自分が進むべき道はどこにあるのか。ディランの影に導かれながら本当のロックを探す……。

スピード・ウェイ
中島のバンド。

「アイデン＆ティティ」主な登場人物

ロックンロール対談

ロックの基本はハードロックだ!!

—走れ、熱いなら!!

JUN MIURA

MASAYUKI QUSUMI

PANTA

薄れてきたロックのアンチ性

みうら　頭脳警察になる前は、どんな事していたんです?

パンタ　みんなガクッと来るかもしれないけれど、アマチュアやってて、その後ホリプロに入っちゃたんだよ。

久住　ホリプロ!?　意外ですね。

パンタ　当時のバンド仲間の兄貴の勧めでね。でも一ヶ月くらいでケンカしてやめたよ。あの頃はGSブームの断末魔あたりでね。でも、アメリカ西海岸のフラワーピープルとかさ、ちょうど時代の変わり目でさ、もう自己主張の過渡期だったと思うよ。試行錯誤しながらもさ。

みうら　その時はいくつでしたか。

パンタ　18才かな

久住　若い!!

パンタ　その後、R&Bの「モージョ」というバンドでしごかれたりしてね。それからT氏という人に出会って「バンドやらないか」って言われて、じゃ俺がベースとボーカルで、前から知り合いだったトシ(頭脳警察)と一緒にやることになった。で、そのT氏がバンド名を「スパルタクスブント」にするっていうんだよ。ローザルクセンブルグがいた当時の社会主義団体の名前なんだな。でもその時俺はノンポリで何も知らなくてさ、他人に言わせると頭脳警察の前身はスパルタクスブント、となっているんだけど、本当は全然関係無い(笑)。でもさ何てカッコ悪い名前かと思ったよ。ブントって何だよコレはっ!!　本当にカッコ悪いよなあ(笑)。

久住　いいなあ、その話(笑)。

パンタ　で、結局T氏はリーダーとしては煮えきらない人だったんで、トシと二人でやろう、という事になってね。「アマチュアだから好き勝手やろうぜ、それにバンド名も日本語にしよう」ってさ。

みうら　最初はどういう感じの曲をやってたんですか?

パンタ　まだ政治色とかは無くて、マザーズとかさ、要するにアレン・ギンズバーグっぽいやつかなあ。

みうら　それはギンズバーグを理解してやってたんですか?

パンタ　いや、理解してないね。まったく誤解をしていた(笑)。当時ギンズバーグは『大いなる愛』を説いていて、それは男女なら不思議はないけれど、人間として男と男が手をつないでどこが悪いかっていう事でさ。「うーん、確かにそうだ〃大いなる愛〃だ、これからは!!　それでトシと二人で手をつないで新宿歩いてさ(大爆笑)

みうら　コレが最先端だと(笑)

パンタ　俺は単純にその通りに思っていたワケ。そしたら何の事はない。彼はゲイパワーを説いていたんだよ。(笑)「何が大いなる愛だよ、バカヤロー!!」ってさ。

久住　最高だね!!(笑)でね、18才でホリプロ蹴って試行錯誤するあたりの感じが、今みうらさんが描いている漫画とよく似ているんですよ。イカ天ブームに乗ってプロになったけれど、ブームが去ってね、さてどうしようか、みたいなね。

みうら　どう仕様もない、でもやりたい事はある。で、一応「大いなる愛」じゃないけれど、同棲している女のコがいてね、それで男のコがアイデンなら女のコがティティでね。

パンタ　合わせてひとつの自我になる。

みうら　ええ、でも、昔は女のコってよく分からなくて、ディランが「キリスト教ですか?」てインタビューされた時、「いや、神様は女なんだ」って言ったんですよ。その時僕はただこう柏手打って女のコを崇めていたらいいのかな、と思っていましてね。

パンタ　観音様って?(笑)

みうら　そうしたら開いてくれるのかなと思ったら、どうやら違っていた(笑)。今なんか、くだらないボディコン女にブツブツ言っているうちは、男はダメじゃないですか、女を攻撃しているうちはね、女は自分を映す鏡だと考えれば、女がダメになるという事は、男がダメになっているっていう事ですから、でも当時はそんなふうに考えられなかった。

パンタ　なるほどね、それはいえてるよな、でも女のコに限らず、他人と話すという事は、それだけで鏡になっているという事も多々あるもんなぁ。そういう事に気付かないと、いつまでたっても自分は見えてこないもんなぁ。

みうら　でも、そうやって試行錯誤する手段も薄れて来ているから、何をやるにしても、テーマが選びにくくなってきているような所はありますよね。バンドブームにしたって一般の人のテーマじゃない。だってロックってアンチだから、一般の群をなしている人に向って「バカヤローッ!!」て言うようなもんだからね。RCの清志郎さんが、反戦、反原発の歌を出した時も「車の中で女のコと聴けない、キヨシローはダメになった」って言うヤツがいたんですよ、それを聞いて「あぁ、みんなロックって本当は嫌いなんだ」と思ったんですよ。

パンタ　それにさ、アンチをテーマにすると、不思議な事にひとつトリックがあってさ、例えば頭脳警察がステージで、「バカヤロー!!」って叫ぶと、聴いているヤツは「俺以外の全部に向っていっている」と思うんだよね(笑)

久住　あぁ、私をのけたみんな。なんだろうね、そのトリックって。

パンタ　で、それとは反対にさ、中には自分につきつけられているっていう被害妄想を作り上げちゃうヤツもいて、ただ単に不特定多数の世界に向けて歌っているのに「パンタさん、なんであんな事いうんですか」って言って来る(笑)。

みうら　そんな事言われても困る(笑)。

パンタ　1950年２月６日生、埼玉県出身
'69年「頭脳警察」結成。シンプルなバンド構成ながらも、ダーティでパワフルなサウンドは、当時の若者を熱狂させた。「さよなら世界夫人」「銃をとれ！」など名曲を生み出すが、'75年に解散。'77年「PANTA & HAL」を結成し２年間活動した後ソロに。「KISS」「クリスタルナハト」など多数のアルバムを発表。'90年「頭脳警察」活動再開し全国ツアーを行う。現在はソロアルバムのレコーディング準備中。

ロックの基本は一人称だ

パンタ　「死んだ人間に〝オマエは死ぬ価値が無い〟なんて、俺の事歌わないで下さい」ってさ(笑)、なんだか知らないけれど、そういうヤツって「天の声」として聴いちゃうから危ないよなあ。

久住　もう極端だね。

みうら　でも、バンドブームでロックが日常性を帯びて来たから、ナメてしまってる所ってあるよね。「ゲットゥザチャンス」っていったって、つかめないから困っているのに(笑)、夢をつかもうとかいわれてもあまりよく分かんないですよ。アメリカのロックにありがちだけれど、それを単純に訳した世界で満足しているのは良くないと思うな。スプリングスティーンが来た時も代々木体育館でみんな一緒に「ボーン・イン・ザ・USA」とか歌っていたけど、「オマエはアメリカで生まれたんじゃないだろうっ!! 何歌ってんだよ」とおもってね(大爆笑)。

パンタ　非常に単純でいいね(笑)。そうだよ、アメリカで生まれてないんだから歌えないよなあ。

久住　もう軽くなりすぎちゃったね、ロックって、全然アンチじゃない。

久住　さっき対談が始まる前にパンタさんが「枝葉」の部分じゃなくて「幹」の部分をやりたいって話していましたよね。

パンタ　うん、あの「バンド戦国時代」の中でさ、皆がしのぎを削って個性を出そうとしたワケだ。スカ、レゲエ、サルサ、スラッシュメタル、ハードコアとか、とにかくいろんなバンドと自分達のバンドの差別化を一所懸命図っていたワケだよ。で、一段落してバッと沈静化した時に見たら、枝葉は残っているのに、幹が無いんだよ。それで、7月にリリースする時にさ、じゃ幹をやろうじゃねえか、という事でさ、もうただのロック。ロックはハードロックじゃなきゃイケない!! ロック＝ハードロックだ。ていう事で何のてらいも無くハードロックをやる。

みうら&久住　分かりやすい(笑)。

パンタ　ロック本来が持っているリフで押してくるやつとか、ゾクゾクと来るようなロックの様式美にトライしてみようかと、クオリティ、詞の内容もさる事ながらね。それとは別に幹をやりたい。

久住　「王道」を、それは分かりやすい。

みうら　分かりやすいし、俺も絶対にそうだと思うもん。

パンタ　それぞれが個性化して自分のシエアを持ち続けてね。新・新興宗教みたいな感じになって行くのではないか(笑)。で、そういう事であれば、そこにひとつ幹が必要であろうと、ね(笑)。

みうら　核となるブッダのところですね。

パンタ　まあその辺をね、やってみたらいいんじゃないかと。でもさ、いろんなグループがロックっていって出て来ているけれど、ロックはポップスという大きなジャンルの中のひとつであって、だからもう堂々と「ポップスグループです」と宣言するのは、これはもう素晴らしい事なんだから、あえてそこで「ロック」

と言う必要はないワケだよね。こないだ新聞のコラム見て唖然としたんだけど、「優等生のロック・渡辺美里」って書いてあんの。優等生のロックなんてねえよっ!!(笑)

みうら もうロックって言葉も「おまんこ」とかに変えちゃってね(笑)、そうすれば堂々と言えるヤツしか使えなくなるから。「俺今おまんこやってんだよ」ってさ(大爆笑)。その方が正しいような気がするなあ。

パンタ でも、そういう意味だよねロックって……「優等生のおまんこ」ってどうゆうんだろう(笑)。

みうら&久住 分かんねぇなあー(笑)。

久住 やっぱりさぁ、ロックとかハードロックとか言ってもね、強いなと思わなきゃいけないのは、パンタさんにしても清志郎でも、ちゃんと「個人」をやってるでしょ。「俺パンタやってます」っていうのがあるでしょ。それはブームとは関係ないからね。それは強いよ。

パンタ ロックっていうのはさ、i、me、mineていう第一人称だからさ、一人称で歌うのが基本だから。

みうら そう思うんだけれど、パンタさん大きい声で言ってくれないと届かないよ。一人で出るのが恥ずかしいからバンド組むんだよね。みんな合コンで出会ったサークルでやったりするから、付き合っている女をキーボードに入れたりしてさ(笑)、ああなるともうロックは生まれないよね。とりあえずひとりで歌うことから始めないとダメだよ。だから、それこそディランがギター一本でやってフォークシンガーって言われた時も、ロックっぽかったんですよ。

久住昌之　1958年7月15日生、東京都出身。'81年「夜行」(泉晴紀氏と組み〝泉昌之〟として)でガロにデビュー。漫画原作のほか、エッセイ、ビデオ監督など、広い範囲で活躍。現在は弟の久住昌也氏と組んだQBBでの作品も好評。'82年にバンド「モダン・ヒップ」結成。

パンタ ホント、そうだよな。

久住 ジミ・ヘンドリックスもロックを感じたからこそ、ディランの曲を取り上げたんだろうね。

みうら 騒がしいのがロック、静かなのがフォークって言われて来たけれど、ひとりでやる事がロックだと思っていたから。

久住 最終的にはそうだよね。だから、バンドブームでふるい落とされた人達がさ、バンドで協議して「じゃ俺たちはスカにしようか」ってとこがさ、やっぱり弱いよねぇ。多数決で平均点でスカが好きだからやろうっていうのは……。やっぱり「俺パンタやってます」って方が絶対に強い!!

みうら もうさ、今はバンド始めるってところにすでに問題があるような気がする。特に日本にね。バンド始める時に、「音楽やりたい」っていう人がいるじゃない。俺はそこが分からなかったの。漫画でも何でもいいんだけれど、何か伝えたい事があるじゃないですか。その伝えたい事もないのにバンド組んでいるんだから、もうそれは排除してもいいような気がするんですけどね。出発点から弱いような気がするな、今は。そんな人ってひとりじゃ絶対できないよ。

ストーンズがバンドの基本

みうら 俺ね、お寺の伽藍図ってあるでしょ。あれ、ステージングと同じだって気付いたんですよ。山門はボーカル、右の金堂がギター、でこっちに五重の塔がベース弾いてて最後に講堂がドラム(笑)

久住 それってズバリだねー!!

みうら 日本にもう何百年も昔からロックの形態があった。様式があったんだよね。それはやっぱりお釈迦さんだった。

パンタ いいねえ、山門ていいねぇ。

みうら 顔だもん。

久住 だから格好良くないとね。パンタさんにとってバンドってどういう感じなんですか?

パンタ 俺はやっぱりリードボーカルでいたいんだよね。だから頭脳警察はワンマンバンドだった。要するに完封型ピッチャーのバンドね(笑)。だから自分が落ち込むと全部ダメになる。もうそれが全てだった。でも「PANTA & HAL」になってからは「よし、守備はバッチリだ」と。もう打たせてもいい、打たせて取る型に変わったワケよ。「完封狙わなくてもいいんだ」と思ったらすっごい肩の力抜けてね、俺は歌に専念できたんだ。で、ボーカルはピッチャーでキャッチャーはドラム。腰骨ね、で監督はプロデューサーね。

久住 そう言い切れるのは、一回昔にひとりで全力投球やっているからだよね。

みうら 打ちっぱなしで(笑)

久住 そういう事をやっていないと、それでバンドを組んだりして、俺はピッチャーだのキャッチャーだのっていってモメるんだよね。

みうら もうストーンズがロックバンド

の基本だよね。
久住 チャーリー・ワッツが御本尊ね。これがまた彼じゃなきゃダメなんだよね。キーボードなんていないしさ。
パンタ キャッチャーがコケるとみんなコケるからね。ベース配分も全部キャッチャーによるし、だから、キャッチャーがリーダーの方がいいかもしれないよ。
久住 よく出来ているよね。
みうら 日本にはまだロックンロールバビロンが無いから「○○っておいしいポジション取ってんじゃん」っていう事になるでしょ。「ボーカルがソロになって抜けられたら痛いな、ベースって損だな」ってさ(笑)、損とか得という世界になっちゃうよね。

みんな直感を恐れている

みうら パンタさん、昔ラブソングやった時に「死ね!!」とか言われたりしたけれど、そういうのは全然平気なんですか。
パンタ 全然大丈夫!!
久住 これじゃなきゃダメだよね(笑)。シューンとしてたらダメだよ。
パンタ だって最初から分かり切ってたし。でも、あの時の俺がやりたい事はそれだったしね。ただスタッフからは「パブリックイメージから大きく逸脱するからやめろ」って反対されたけれどね。でも自分のやりたい事を押さえてまでファンに合わせるなんて、これほど失礼な事はないからさ。だからソッポを向かれようが今やりたい事はコレだってやるのが本当の姿勢だからさ、それでやったワケよ。
みうら じゃ、裏切ろうとしてやったんじゃないんですね。
パンタ うん、全然違うよ。でもあの時二人の人間に大きく誤解されたことがあってさ。ひとりは中村とうようにね、「パンタ、売れセンでやるんだったらもっと思い切り行くべきだ」って言われた。でも俺は別に売れセンをやったんじゃない。ただ軽いポップスをやりたかっただけなんだよね。もうひとりは平岡正明で「ラブソングだったらパンタのラブソングはもっと違うだろう」ってさ。ラブソングって言われたけど、俺はラブソングやってるつもりはなかったし。まっ便宜上そういう言葉は使われたかもしれないけどね、オレがラブソング作ったら、もっとドロドロになるよ。で、彼が「パンタよ元に戻れ」とかさ、ケンケンガクガクの論争があってりしてね。
久住 あぁ、ありましたねぇ。
みうら みんな、いろいろある音楽の中で「パンタ部門」ていうのを期待しているんだよね。押しつけるんだよ。ファンてさ。でもパンタさんはパンタさんなのにね。一回イメージをつけられると、なかなか抜け出しにくいよね。
パンタ 漫画もそうかもしれないけれどミュージシャンて、常日頃、それとの戦いだね。
みうら 一生「世界夫人〜〜〜」なんて歌ってられないもんね。うたいたい曲あるのに。
パンタ パブリックイメージからの脱皮っていうのは永遠のテーマだろうなあ。
久住 やりたい事をやるのって、本当に大変だよね。
みうら でも今は情報量も多いし、昔の人より賢くなってきているから、五手位先を読んだりしちゃう。俺らの年代は二手位までしか読めなかったから。今の人は良し悪しは分からないけれど、賢いから考えちゃう、先々の事をね。それで自分のやりたい事も出来なくなってしまっているところもあるよね。
パンタ 俺も少しは先を読んだりもしてみるけれどさ、いざ動く時は直感だよね。直感=本音、これ程強い物はないよ。だから昔やってた事も、その時には自分が信じてた事を歌っていたんだから、決して恥ずかしい事ではないよ。それをどん

みうらじゅん　1958年2月1日生、京都府出身。'80年「ウシの日」でガロにデビュー。ゴジラ、仏像など、集収家としても有名。ウシ、ハニワ、カエルのキャラクター漫画から一変して、'91年8月号より本音のロック漫画「アイデン＆ティティ」を連載。'88年にバンド「大島渚」結成。

なに責められようがしようがねえじゃん。だってやりたかったんだもん(笑)。

久住　今は本音を出さないように、出さないようにしているからね。

みうら　賢いっていうのはそういう意味だよね、ズル賢い。きっと直感の出し方っていうのがわからないんだよ。

パンタ　最初は論理で入っていくワケじゃない、直感で入っていって、論理はあとからついてくる。こじつけみたいにさ、それでいいんだよ、実際そうなんだから。

久住　みんな直感を恐れているよね。はずれるのが怖いんだよ。

みうら　はずれると全部崩れちゃうと思っているんだよね、きっと。

パンタ　という事はさ、自分を信じていない、という事になるよな。俺、よく音程地獄に堕る時があるんだけれど、するとなかなか修正が出来なくなるんだよな。そういう時はハッと気が付いてドラムを聴くんだよな。そのリズムに体を合わせるの。ドラムの音だけをきいて歌う、音程を気にせず体にまかせる、体にまかせる、体を信じる、すると、ピタッと会うんだよね。

久住　いい話だなぁ、それは。

パンタ　ストライクゾーンを考えないでキャッチャーのミットだけを考えてね。ストライク、ストライクって言ってても絶対にストライクに行かないよ。だからいざっていう時の大勝負の時なんか、誰だって大緊張するんだから、そういう時は自分を信じるしかないんだよね。

みうら　自分の直感ていうものは、多分最初から持っているものではない、自分の子供を見ていてもオリジナリティというものはなくて、母親や俺やいろんな人を見て真似して合体させて言っている。だから本当のオリジナリティを作り上げて行く場合、映画とかロックとか、カッコいい物に一杯ふれて感動できる自分であればこそ、要素をどこかで覚えているから、それをつなぎ合せて自分の直感となっていると思うんですよ。初めから「俺はオリジナリティがある」て言うヤツがいると凄くうさん臭くてね。たくさん自分がカッコイイという基準をみつけないと、ロックも出来ないと思うんだけれど。

パンタ　でさ、その基準をみつけるためには、趣味が音楽だけじゃダメなんだよ。異ジャンルと接触して、いいと思ったものはどんどん吸収しないとね。ひとつの世界にしか目を向けないのは危険だね。

みうら　俺も絶対にそう思う。ロックやってて趣味はロックです、なんてそんなのはもうダメだよ。小さい頃かそうだった、というのはウソだと思うな。カッコイイものをどんどん摂取して、その中でチカチカカライトがつけば、カッコイイと見えたりするんだよ。

ロック＝ウンコ説!?

久住　今、みんなそういうのをデーターで読んでいるから、それでやろうとしているから「直感ていわれても、私わかりません」てなる(笑)。原体験がない。

パンタ　直感がはずれるのもまた楽しいんだよ(笑)。

久住　そこの強さだよね。パンタさんの粘り強さってさ。

みうら　だからラブソング事件でパンタさんいろいろ言われたけれど、それでパンタという所が崩れたワケじゃないからね。

パンタ　俺はあれで大正解だったと思っているよ。あそこでやってなかったら、ずっと引きずってたよ。あの時、ポップスという自分の中の浮いた部分をポーン

と出しちゃった事によって、次の作品がどんどんピュアになって来るワケだから。

久住　ガス抜きされてね。

パンタ　思い浮かんだ事はその場でどんどん捨てていくというのがいいね、ウンコみたいなもんだから、ためるとよくないよ(笑)。

久住　宿便になる(笑)。

パンタ　やっぱりウンコ出したらそれをジーっと見ないとね。自分の目で確認してみないと(笑)。

みうら　そうですよね、自分のウンコにはどんな要素が入っているのか、わからなくなってしまうしね。

パンタ　出す時は自分では見えないけれど、出した後って見えるワケじゃない。そこの部分が……。

みうら　ロック=ウンコ説!!（笑）汚いなあ。でも、これからロックをやるヤツに対して、パンタさんに絶望的な事を言ってほしいんですよ。もうこんな事やらない方がいいよって、それでもやりたいなら相当ガッツ入っているヤツだから、「いや、ロックはいいよぉ」てきくと、やっちゃうんだよね、人生間違ってしまう。だって最初から向いていないヤツっているんだから(笑)。

パンタ　向いてないという事は、その先ずっとカッコ悪い事をやらなきゃいけないワケだからな。

久住　バンドはいずれ解散するもんだってね。

みうら　解散してもひとり残っていると、「ああ、あの人にはやっぱり勝てない」っていう事になるしね。ロックって女にモテたりとか、いいイメージがあるもんね、やっぱり、若い人にとっては。

久住　パンタさんなんかでも、今までやって来た中では、そういう悩みってあったでしょ。

パンタ　無い、全然ない（大爆笑!!）

みうら　こういう人って苦労とかしてないと思う、好きな事しかやってないんだもん(笑)。

パンタ　うん、苦労してない。

久住　ハハハハハ!!

みうら　苦労している人って顔に出るけれど、パンタさん出てないもん、シワはあるけど。

パンタ　これ笑いジワ(笑)。

久住　もう何も言えない!!(笑)

みうら　自分にむいている事をやるのは苦労じゃないんだけれど、それを見つけられないうちに、違う所に憧れて入っちゃうから苦労するワケですよね。

久住　ロックに苦労を感じるようじゃ、やめた方がいいよねぇ。

みうら　あん時メチャクチャだったって言っても、それ苦労じゃないもん(笑)。メチャクチャやってるんだもの。どう仕様もない人なんだから、昔から(笑)。

パンタ　現実的には粗食に耐えて、ってな事もあるけれどさ、まぁ、やりたい事やってそれが続けられているんだから、ロックに苦労話は似合わないよ。演歌じゃないんだからさ。

みうら　ところでパンタさんが音楽をやり始めた頃、憧れの人って誰でした?

パンタ　あっ、俺はもうず〜っとフランスギャル!!（大爆笑）

みうら　そうなんだよね、夢みるシャンソン人形なんだよ、知らなかったよなぁ。

久住　そうじゃなくてロックでは…。

パンタ　別にない(笑)。

久住　頭脳警察とフランスギャル!?(笑)

みうら　だからポップス系のアルバム出した時にそうやって叩かれて、でもその後雑誌のインタビューでさ「だってフレンチポップス好きなんだもん」っていうセリフ読んだ時、ストレートでおかしかった(笑)。そりゃもうフランスギャル好きなんだもん、しょうがないよねぇ(笑)。

久住　いいなぁ、いいなぁ、もう誰も何も言えないね(笑)。

1992年1月27日
ビクタースタジオにて

文責・編集部

頭脳警察<伝説の72分30秒>
LIVE IN CAMPDRAKE
(ビクター　定価3000円)

初公開!!（写真は全てシングル盤、これもほんの一部）

（大島渚ファースト）↓

僕は一生ディランに成れないだろう

ひとは一番遠い存在に憧れる――

今から20年ほど前、僕は生まれて初めてボブ・ディランという存在を知った。その頃、いっぱいいた日本のフォーク・シンガーに多大なる影響を与えた事も知った。誰もが彼のようにありたいと願っていた事も知った。フォーク・ギターを買ってもらって、ハーモニカ・ホルダーも首から下げた。よく分からなかったが反体制の歌もいっぱい作った。文化祭で歌ったが何も受けなかった。浪人時代、東京の片隅でディランを聴いて暗くなった。つき合ってた女に「踊れる曲かけてよ」と言われムキになった。ボブ・ディランが初来日した時、僕は二回目の受験を数日後に控えてた。ディランは歌ってた。バンドはいたけど、たった一人で歌ってた気がした。その後、荻窪の四畳半のアパートで彼女を抱きながら〝オレはこれでいいのだろうか?〟と初めて自分を疑った。生まれて初めて僕は自分を疑った。「ふさわしくない事をしないで、やれる事をやるだけさ」ディランは歌ってた。僕は初めて受験用の絵を描き始めた。二浪目の春、美大に合格、人生は一ペンしてバラ色になった。やれなかった事が何でも出来そうで、そのくせやらなきゃならない事が多くて何も出来なかった。漫画を描いた。友達から「ガロ」にしか載らないよと言われ、ガロに持ち込んだ。10回ぐらいボツをくらった。当時、編集長だった渡辺和博さんに「あんた、和田誠って名前変えた方がいいよ」って言われた。当時、僕は和田誠さんに似せた様な絵を描いていたので、その言葉はショックだった。ボブ・ディランは歌ってた「ふさわしくない事をしないで、やれる事をやるだけさ」と。大学を卒業してプラプラしてた。周りの人の優しさで何本かイラストの仕事をもらった。ちっとも

ジャケット撮影／幸島敏

世界各国から集めたみうら氏の膨大なディランコレクションの中から、ほんの一部をここに

苦労をしてなかったけど、人一倍売れたいという気持ちが強かった。どんどん世に出ていく同世代の人たちを羨んだ。僕はそんな自分が大嫌いになった。それでも仕事は増え始め、もっともっと認められたいと思った。そんな時もディランは「ふさわしくない事をしないで、やれる事をやるだけさ」と歌ってた。糸井重里さんに「おまえはもうダメだ」とキッパリ言われた夜、僕は本当に何がやりたかったのか?僕のやるべき仕事は何なのか?と考えた。「おまえは一人でやっていく事の怖さをまだ知らない」その時、糸井さんの言葉の意味がよく分からなかった。結婚もした。子供も生まれた。30歳にも成った。ディランが言ってた「DON'T TRUST OVER THIRTY」の30歳も越えた。"イカ天"にバンドで出てキャーキャー言われた。浮かれた、ただ。いっぱい女ともした。さて、空しくなった。「自分自身と闘ってる人ほど激しい闘いをしてる人はいない」ボブ・ディランは言った。「内なる敵と戦っているならば外側の敵が割り込む余地はない」とも言った。この歳になってやっと僕は自分が分からなくなった。ずっと分かったつもりでやってきたのだ。僕は意外と真面目だって信じてた。でも、意外と不真面目だった事を知った。「愛しかない。それが世界を動かしている。それなしでは何もできない」ディランは生まれて初めて聞いた時から歌い続けている。僕にはハッキリとまだ理解出来ない。僕の人生は実験だと思っている。ただこれだけは言えるだろう。僕は一生、ボブ・ディランのような存在に憧れ続けるだろう。人は一番遠い存在に憧れるものだから——

みうらじゅん

↑
（大島渚セカンド）

私のロック

×ラスト・ワルツから逃れて

杉浦日向子［漫画家］

小学校六年から、二十一歳迄の十年間がちょうど七十年代に当たる。あの頃、なんであんなに、ロックを聞いたろう。寝ても覚めても、聞きたかった。いくら聞いても聞き足りなかった。聞いても、聞いても、聞いても、飢えていた。

バイトをし、昼飯代をケチり、レコードを買った。輸入の廉価盤や、なるべく新古品に近い中古盤ばかり買った。国内盤の新譜二枚分で、三枚買えた。部屋へ帰ると即、テープへ録音し、レコードを封印した。中古屋に転売する時の事を考慮して、レコードは慎重に扱い、丁重に保管した（う～ケチクセエ、ナサケネエ）。

国内盤じゃないと、たいてい歌詞カードが付いてないので、リフレイン部分しか歌えなかった。音盤のドレイだった中学高校の六年間は、ほとんど同じ黒っぽい服、美容院いらずの三編み姿で通した。髪はやがて腰の下ハルカ伸び、トイレ時は、肩に掛け、手で押さえなければならなかった。それでも、一枚でも多く、聞きたかった。

思えば小六の冬、初めて買ったレコードは、プロコルハルムのシングル「青い影」。LPは、サイケなジャケット（レナウンのイエイエ風）の、「カラフル・クリーム」だった。後のプログレのハシリで、当時のソレはアート・ロックと銘打っていた。ニイちゃんが「あれってスゴイよな」と、友達とヤタラ感心していたから、ムヤミに買ったのだ。小学校の休み時間は、モンキーズやパートリッジ・ファミリーの話題で盛り上がっていた。「ガキめ」とウソブイて、通学鞄から「ニュー・ミュージック・マガジン」（和製ポップスのニュー・ミュージックではなく、旧世代の音楽に対しての新世代の音楽を指した。いわゆるロック専門誌の中でも、最硬派だった）を取り出し、眺め（百点評価式のレコード・レビュー欄以外、チンプンカンプンだった）た。マセガキと言うより、陰気なセコガキだった。親の理解出来ない音楽、友達の知らないバンドに、つかの間イッチョマエの気分を味わった。

約五年で、三百数十枚集め、内、半数近くは、二十歳前後のビンボーな時に、次々中古屋へ売って、食いつないでしまった。買い取り価格は、一枚五、六百円。毎日が、薄ぼんやりと霞み、あしたなんか、てんで真っ暗だった。

のっけに、クリームを有り難がった縁で、神様スロー・ハンド・クラプトンの敬愛するジェイミー・ロビー・ロバートソンを、その後迷わず、ご本尊と拝んだ。

ハッタリ利かせて斜に構えたアート・ロックと異なり、肉じゃがとかキンピラごぼうの匂いがした。テープが擦り切れる迄聞いた「ビッグ・ピンク」「ザ・バンド」、そして「ロック・オブ・エイジズ」。肉じゃがとキンピラを黙々と頬張って、暗い日々をやり過ごした。懐かしくもなんともない七十年代。ちっとも帰りたくないあの頃。

あの頃の葬送歌、「ラスト・ワルツ」。ドクター・ジョンがかすれ声で「さっちゃない」と唄う辺りで、決まって部屋が歪んで、あの頃へワープする。抜け出たつもりが、今もまだ、あの闇の中なんだ。…Such a night、埒ァ無い……。

×ミック・ジャガーが最高だ！

秋山仁［数学者］

〝親の束縛や干渉はオレの人生をダメにする〟そう感じて、家出したのは高校時代。自分で生きていくんだってそのときから決意していた。そのときから、生活費も学費も自分で稼ぎながらの悶々とした貧しい苦闘の日々が始まった。

高校時代は、まだ自分と似たような仲間もいた。が、進んだ大学は平凡な理工大学の数学科だ。同じ学科の連中ときたら、〝卒業して高校の先生〟とか〝普通に就職してサラリーマン〟になろうとしている平凡な奴がほとんどだった。

〝オレは平凡には終わりたくない。他人に評価されるのなんのじゃなくって、常に自分にこのうえない煌めきを感じれるような生き方をしたい。〟そんなことを真剣に思いながらも、何をしたらいいのか、どんな道を突き進んでいけばいいのか、全くわからなかった。大学にはテスト期間中しかいかなかった。だけど、遊んでたわけじゃない。〝世界に出ていくためには、語学が大切だ〟と漠然と考えて英語と独語の学校には熱心に通った。キックボクシングをやったり、コチニノナをぶっとばしたりもした。生活費はタクシーの運転手をしたり、運送会社の中型トラックに乗って北海道までナスを運んだり、鈴鹿にレーシングカーを運んだり、引っ越し屋になったり、ひと夏の南アルプスの山小屋の番人、朝6時にサンヤの職業斡旋場に並んで………稼いだ。〝ともかく、まず、数学に挑戦し、それにケリをつけてやろう〟そう思ってからは、他の大学の＊＊の講義がいいと聴けば、自分のタクシーで乗り着け講義にモグって聴講した。信号待ちごとに分厚い〝解析概論〟（数学科の学生のバイブル）を開いてボロボロになるまで読んだ。今から考えると、〝傍から見たら本当に変な、かなり危ない奴〟だったに違いない。どこにぶつけていけばいいのかわからないエネルギーをくすぶらせながら、肉体をも酷使することで本人は不安と必死に戦ってたんだ。ちょうど、矢吹ジョーが、少年鑑別所の中でひとつひとつボクシングの基本わざを身につけて、見えない明日へ懸け橋を築いていくのと同じような感じだ。

そんな時代から始まって、屈辱のドン底でたたきのめされた大学院の時代、活路を見いだせないままユネスコの派遣教員としてガーナ、ヨルダン………と世界をさまよっていた時代、何の将来の展望も勝算も無いままアメリカに渡って研究者として認められるまで必死にやってきた苦闘の日々……運転するタクシー、トラックの中で、2畳しかないアパートの部屋で、アフリカ大陸で、雪に閉ざされた白く冷たいミシガンの土地で、胸の中にストレートに飛び込んでくるのはローリング・ストーンズの音楽だった。好きなロックンローラはなんて言ったてミック・ジャガーだ。思い出がそうさせているわけじゃない。彼について特別に何も知らないんだけど、彼の瞬間瞬間、激しく熱く燃え上がるパワーとそれと同居している非常にクールなところがたまらなく好きだ。ただ、若さやエキセントリックさの勢いでいくんじゃなくって、

私

〝赤く真っ赤に燃えあがる瞬間がただたまらなく好き。〟それを知ってて、その一瞬を完全に燃焼させるためだけにすべてを持ってくる（ように感じる）。だから、その炎は純粋だ！いつものすごく赤く熱い！そこがスゴイ！〜たかがロックンロールさ。だけど、こいつがたまらなく好きなのさ〜そう歌ってるミック・ジャガーが最高にカッコイイ！

'85年の〝We are the world〟の一連のボランティアコンサートだったと思うけど、あのときのステージではミックジャガーも個人として参加していたんで、ボランティアの一員として曲の合間に観客に呼び掛ける際に静かな知的な紳士の顔も見せていたけど、ドラムが鳴り、バックが演奏を始めると、もう別人だ。最後のティナ・ターナーとのデュエットは圧巻だった。

ミック・ジャガーが最高だ！

×ジャニスの叫び

しりあがり寿［漫画家］

えらそーに言うけど、人間の一生っていろんなエポックメーキングな出来事ってあるよね。初恋とか、初体験とか、就職や結婚や、肉親の死とかね。だけどそんな中でもケッコー大切なのは、生まれて初めて「サビシサを知る！」ことだと私は思います。あるでしょ。そーゆー時期って。今までメシ食って野球やってギャーギャー騒いでりゃ幸せだったのが、なんだか急にむなしくなってさ、「メシを食ってもムナシイ」「ホームランを打っても何かサビシイ……」とかさ、思春期とか自我の確立とかいろんな言い方はあるんだろうけど、要は「どーも人間ってのはケッコーややこしいもんだぞ」と気付く時期だよね。他の動物はどうなんだろうね。人間だけかね。

でもって、この「ムナシイ、サビシイ」にどういうスタンスをとってやってくかで、その後の一生はずいぶん違うと思うんだけど、中には真向からブツかっちゃうスタンスの人がいてさ、私なんかジャニス・ジョップリンはその代表選手と思います。

どーせさあ、「ムナシイ、サビシイ」なんて解決できっこないから、フツーの人はあらゆる手を使ってごまかすんだろうけど、なんであんな風にガップリ四つに組んじゃうんだろーねー。

そりゃあ、一人でいりゃあ淋しいし、〝自分は何のために生きるんだろう〟なんて考えりゃあ、空虚しくなるしさ。だけど、どうしてあの女(ヒト)はあんな大声で「さびし〜〜〜!!」って唄うんだろう。

人はさ、自由とかを素晴らしいもんだとガンバって、特に60年代とか70年代くらいはもりあがってたんだろうけど、「自由」のもとに「ほっとかれてる」人は、ケッコー淋しくってさ、ジャニスさんとかモロにかぶってたんだろうね。バカだよね、自由なんて人を幸せにしないのにね。

ジャニスの唄とか聴いてると、そーゆー問題をテキトーに何かにまぎらわせてる自分が卑怯者に思えたりしてさ、別にみんなもそうだし、どうしようもないんだから毎日楽しく友達や、仕事や、遊びでゴマかして、その日その日を暮らしてけりゃいいんだろうけどさ、あんなふうに大声で本気(マジ)で「淋し〜〜い!! 淋し〜〜い!!」と唄われると困っちゃうんだよね。そりゃあこっちだって淋しかったりするよ。でもどうしようもありません。

でもさ、世の中はもう少しジャニスの「さびし〜〜い!! さびし〜〜♪」っていう声に耳をかたむけてもいいと思うよ。自分達がどんな深遠の淵に立ってウカれてるのか、やっぱし少し分かった方がいいと思うから。

×ジョン・レノン…音楽は心の治療薬!!

泉晴紀［漫画家］

18の時に金沢を出て、あれから数えて10回以上も引っ越した。一番最初に借りた部屋が四畳半で八千円位だったから、今では20倍近い家賃を払っている事になる。当時なら20部屋借りられる計算になる訳だ。それだけの部屋を借りていれば、倉庫がわりに何部屋も使えて、本やレコードも引っ越すたびに売っ払ってしまわなくてもよかったのに、と思う。

いったいこれまで何百枚のレコードを手離してしまった事だろう。レコードを買っては売り、買っては売り、をくり返していた事の一つの理由が、部屋がどんどんモノで圧迫されてくる、という事への嫌悪感で、引っ越しを機に百枚単位で売っ払ってしまっていた。

それと、いつも、今の自分に必要なものだけで身の周りを固めておきたい、といった気持が、また、その時その時で聴かないレコードを売っ払っていく事になるのだった。

そういう風に思っていても、身の周りのものは少しづつ、少しづつ増えてくるし、聴かなかったレコードも、また何年かすると聴きたくなって再購入しようとした時には廃盤になっている事も多く、結局はムダな事をやっているのではないか、と反省し、今ではCD棚に入りきらなくなった千枚近いCDを、その時どきで一番聴きたいものを全面に並べかえてとっかえひっかえ聴いている。

そういえばオーディオだって、一応はいいものを買い揃えたけれど、結局は机の上に置いたディスクマンでヘッドフォンを使ってCDを聴いている時間が一番多い。そのうちまた悪い癖がでて、CDラジカセ一つあれば充分だ、なんてぬかしてステレオを捨てちまうんじゃないか、と自分の性癖をおそれている。

音楽の趣味がコロコロと変わっていくのも、レコードを売り払ってしまうのに火をそそいでいて、最近じゃブルースとソウルのCDばっかりを買ってきては毎日朝から深夜までアキもせず聴き狂っている。いったいいつまでこの傾向が続くのやら。グッゴー。

そんな気まぐれな自分の性癖をかいくぐって20年近くずっと聴き続けているのが、50枚以上ものマイルス・ディビスのアルバムと、ビートルズやストーンズ、ツェッペリンだが、聴かなくてもこれだけは捨てられない、というアルバムが、ジョン・レノンの「ジョンの魂」とデヴィッド・ボウイの「ジギー・スターダスト」。これ一曲、となると、ここ10年ばかしマーヴィン・ゲイの「セクシャル・ヒーリング」。正に音楽は心の治療薬。

★ツマラナインじゃないですが、扉の絵のカンジ、漫画の中のセリフ「みんな風に吹かれてる」等が全てP153の最後のコマでいっぺんに意味が無くなってしまうのが僕にはカンジたので、選びました。(91年1月号・いわき市・16歳・男)

★作者の虚無的なメッセージを感じた。(91年8月号・横浜市・29歳・男)

★みうらじゅんさん、尊けいしています。(92年1月号・京都市・17歳・女)

★たいくつ。(91年8月号・神戸市・31歳・男)

★そんなこときかれても(92年8月号・浦和市・16歳・女)

★心があたたまるので。(91年12月号・茅ヶ崎市・26歳・女)

★なにかよくわからなかった。(91年8月号・石巻市・19歳・女)

★泣ける。(92年1月号・福山市・16歳・女)

★好きなのに最近こんなのばっかでつまんないです。(92年1月号・福岡市・26歳・男)

★単純明快理路整然(92年1月号・上福岡市・27歳・女)

★みうら氏の漫画は初めて読んだけど感動しました。(91年10月号・安城市・15歳・女)

★だって「時代は変わる」好きだもん(91年10月号・福生市・20歳・女)

★みうら先生の「アイデン&ティティ」は、毎回読むたびにドキリとさせられます。それはきっと、僕たちが生きている時間の中に、自分自身のディランが存在していて、それを気付かせてくれるからだと思います。今後の展開が楽しみです。(92年1月号・入間市24歳・男)

★みうらじゅんとかねこちるの特集もやってください。(92年1月号・府中市・22歳・女)

★ディランが面白い。(91年9月号・桶川市・16歳・男)

★みうらじゅんさんは好きですし、今回ミュージシャン(中島さん)は、なぜか親近感があったので。(92年10月号・横浜市・26歳・女)

★おもいろい みうらじゅんのわかる(91年9月号・3X歳・男)

★みうらじゅんさんはゴヂラを盗んだ!(91年11月号・京都市・24歳・男)

★アイデン&ティティとっても好きです。「愛しかない それが世界を動かしている」ディランが時々出てくるのが意味ありげでいいです。中島さんの彼女みたいな女性っていいなあと思います。覚めた目で見てそうで真実ちゃんとつかんでそうで。大人だなあ。(91年12月号・大阪市・20歳・女)